

あいさつにかえて

## 映像民俗学の提唱と三つの課題

民俗事象を生きた動態としてとらえることのできる映像(ムービー・ビデオ)は、これからの民俗調査に重要な役割を果たすのではないかと考え私たちは、映像による民俗学・映像民俗学を標榜するささやかな一つの会を、一九七四年の十一月に創立しました。

「映像民俗学を考える会」と名付けられた私たちの会は、映像と民俗学の結び得る方法と理論を模索しながら、その映像民俗学の分野の確立を目指して、これからも少しずつ、進んでゆこうと考えています。

今までの映像と民俗学の交流の内実は、大変に貧しいものであったと思います。民俗学の分野では、ペンとノートの調査のみに固執を続け、映像表現のもつ可能性に積極的に切り結んでゆくことをしなかったと言えます。

映像の分野では、民俗事象をとりあげることもしばしばあったのですが、民俗学の立場からみて大切なポイントを見落している。つまり、映像に携わる人間は技術には熟知していても、大切なポイントをおさえる眼を欠落させていたと言えるのではないのでしょうか。

この両分野に、まれに交流があったとしても、〈撮るもの〉と〈解説するもの〉とに分れ、実質において、〈映像は映像〉〈民俗学は民俗学〉と、セパレートしていたのが現実であったと思います。私たちの目指す姿は、映像表現者であって民俗学者、民俗学者であって映像表現者、つまり優秀な映像表現者であると同時に優秀な民俗学の専門家であると言うことなのです。

そのような両面を備えることによって、映像民俗学は映像民俗学として、真に存在し得、貴重な民俗資料ともなる映像を、後世に残すこともできると考えるのです。しかし、それはあるべきファイナルな姿であって、一朝一夕に実現するものでもありません。長い時間の友かて積みあげられてゆくものです。映像に関わる者と民俗学に関わる者とで構成されている私たち「映像民俗学を考える会」は、その方向にむかう工作者としての努力を背負いながら、資料化を可能にするまでの方法・技術論を映像民俗学の一つの課題として取り組んでゆきたいと思います。

それにしても、民俗学の〈魂〉と映像という〈器〉を一致させることは容易なことではありません。映像メディアの利用には、多くの金がかかるからです。民俗学側が映像表現の可能性に目を潰ってきたのも多くはその事実に起因するでしょうし、映像の分野が民俗事象を見せ物的・興味本位に扱ってきたのも、金のかかることを理由に、商業主義ベースの上で作品化してきたことによります。しかし、その桎梏から脱け出す努力をしなければなりません。それはどのように可能であるのか、私たちは自らに問うてみるとともに、まだ出会っていない隠れた仲間たちとも手を結び、真の映像民俗学を実現する社会的基盤の確立に努力を傾けてゆきたいと思います。それが私たちの抱えるもう一つの課題です。第三に、私たちは「民俗資料映像ライブラリー」の創設を提唱します。日本の伝統的な生

活文化、民俗に関する映像の保存と利用のために、是非実現し友ければならぬと考えます。

その為の捨て石になるべく、いま私たちは各都道府県及び映画・テレビ会社に調査表を送り、民俗事象をとらえた作品のリスト・アップを進めています。各地の祭り・信仰・民俗行事・芸能・生活などをとらえたフィルムやビデオは、例え不十分な断片であっても、ある時期・ある時間・ある場所でとらえられたものである限り、貴重な資料価値を持つことは言うまでもありません。伝統的な生活文化や民俗の崩壊されてゆく現実を思うとき、それらは、映像民俗学の未来の一つの遺産ともなるものです。あちこちに散在し、死蔵され、また忘却、散逸しかねないその映像民俗資料の所在を確認する作業を、とりあえず続けてゆきたいと思えます。四人の貧しい私たちの会ですが、以上、現在考えていること、やろうとしていることの三つを簡単に記しました。私たちの提唱する映像民俗学が、日本人の生活文化の歴史とその将来の研究に大きく貢献するのではないかと信じ、私たちは口火の役割を、力のかぎり果してゆくつもりです。皆様のご協力をお願いして挨拶にかえさせていただきます。

一九七七年一月一日

映像民俗学を考える会

野口武徳(成城大学教授社会人類学)

宮田登(筑波大学助教賃・民俗学)

野田真吉(映画作家)

北村皆雄(映画作家)